

理性的で高潔な、まるで北欧の静謐な森を思わせるブロードがかったロングヘアが、午後の柔らかな光を吸い込んで金色に透ける。その隙間から覗くのは、厳しい家庭の長女として、また周囲の期待を背負う優等生として生きてきた英里の、凛とした美貌だ。

「英里、最近頑張りすぎだよ。君のその強すぎる責任感が、細胞の柔軟性を損なわせているんだ。今日は僕が、君の論理的な思考を一度リセットして、真の解放へと導いてあげるからね」

俺の、一見すると深い慈愛に満ちた囁きが彼女の耳腔を震わせる。モデルのように整った瞼の奥にある二重が、不安と微かな期待の狭間で激しく瞬いた。

「やめて、たーくん……」

低めの落ち着いたトーンを維持しようとする彼女の声は、俺の指先が△△カップのスレンダーな胸板を掌握した瞬間に湿り気を帯びて濁り始める。57cmのウエストという、あまりにも細く脆い物理的な境界線。そこに手をかけ、彼女が大切に守り抜いてきた清潔な思考を「昇華」という名のロジックで蹂躪していく。理性の鎧が、一枚ずつ、しかし確実な力で剥ぎ取られていく――。